

令和4年度 第101回全国高等学校サッカー選手権大会埼玉県大会 総評

「昌平高校 2年ぶり5度目の優勝」

報告者：高体連技術委員 庄和高校 野木 悟志

令和4年度第101回全国高等学校サッカー選手権大会埼玉県大会が8月20日から11月13日の期間に開催された（一次予選8月20日～8月27日、二次予選トーナメント10月9日～11月13日）。二次予選トーナメントは、U18プリンスリーグ関東に所属している2校とU18埼玉県（S1・S2）リーグに所属している24校（セカンドチームの6チームは除く）、そして一次予選を突破した26校の計52校によるトーナメント方式で実施された。優勝は昌平高校、準優勝に成徳深谷高校、3位に埼玉栄高校と浦和学院高校という結果となった。昌平高校は2年ぶり5度目の優勝を飾るとともに全国高校選手権の出場権を獲得した。

優勝した昌平は、今夏の全国高校総体3位とU18プリンスリーグ関東1部首位といった好成績を挙げているチームであり、今大会においてもその実力と経験値の高さを示した。基本システムを1-4-2-3-1とし、高い個人技術、球際とフィジカルの強さ、素早い攻守の切り替えで試合の主導権を握り、決勝を含めた全4試合で18得点2失点と他を寄せ付けない強さを発揮した。チーム全体でテンポよくパスをつなぎながらボール保持率を高め、上手さと力強さのある攻撃を仕掛けて、相手を押し込む。昌平の攻撃を食い止めるために、自陣に引いて守備ブロックをつくるチームや前線から積極的にプレスをかけてくるチームなど各チームが対策や戦術を練って挑んでくるなかでも、強力なアタッカー陣が多彩な攻撃を繰り出しゴールを奪った。単独でのドリブル突破、コンビネーションプレーでの局面打開、質の高いセットプレーなど得点パターンが豊富であった。攻撃の中心的な役割を担うのがJ1FC東京内定の右SH⑩荒井である。フィジカルコンタクトの強さを生かしたドリブル突破や精度の高い左足のキックを武器に多くの得点とアシストを記録した。準決勝の埼玉栄戦で決めた直接CKは美しい放物線を描いた素晴らしいゴールであった。また、ダブルボランチを組む⑦土谷と⑥佐藤は攻守のかじ取り役を担い、チームの勝利に大きく貢献した。⑦土谷は広い視野から攻撃的なパスを繰り出すゲームメーカーとして活躍し、多くの決定機を演出した。一方の⑥佐藤は危機察知能力が高く、鋭い出足でプレスをかけて相手の攻撃の芽を摘む献身的な働きでチームを支えた。決勝戦は⑦土谷と⑧長がダブルボランチを組んだ。2人のボールを失わない巧みなテクニックで中盤を掌握し、ドリブルとショートパスで攻撃にリズムを生み出し、相手守備陣を翻弄した。⑧長は左SHを主戦場とするが、ボランチのポジションでも高いレベルでプレーすることができるポリバレントな能力を持ち、抜群のサッカーセンスを感じさせる選手であった。守備については、個の局面での強さと全体をコンパクトにした陣形で相手に自由なスペースと時間を与えないことを徹底する。守備の要は両CB④津久井、⑤石川である。④津久井はJ1鹿島内定の注目DFとして今大会を迎えたが、全国高校総体で負った怪我の影響で大会序盤は途中出場をしながら試合感覚を取り戻した。準

決勝からはゲームキャプテンとして先発出場を果たし、ピンチを未然に防ぐ的確なポジショニングや相手FWとの駆け引きに優れたクレバーな守備でチームを優勝へと導いた。⑤石川は高い判断力に加え、空中戦と球際の強さを発揮し守備に安定感をもたらした。また攻め込んでボールを失うと、敵陣で即座に複数人で囲んで奪い返し攻撃に転じるなど切り替えはどのチームよりも早く優れていた。今年度の都道府県予選に目を向けてみると、全国常連校・強豪校の敗退が相次いでいる。一発勝負のノックアウト方式の難しさを改めて感じるような結果と言える。そんな状況のなか、結果と内容ともに充実した戦いぶりで実力通りの強さを発揮し、優勝を果たした昌平は見事であった。

準優勝した成徳深谷は、3回戦からの3試合全てにおいて1点差で勝利を収めた粘り強さと勝負強さを兼ね備えたチームであった。決勝の昌平戦では、相手に押し込まれる苦しい展開を強いられるなか、体を張った守備でゴールを割らせずに試合を進めていたが、後半に失点を許し0-1で惜敗した。基本システムは1-4-4-2であり、強靱なフィジカルと豊富な運動量を生かした攻守にアグレッシブなサッカーを展開する。攻撃は2年生コンビのFW⑪秋本と⑮平井をターゲットにロングボールを供給し、ボールを収めて時間を作ったり、セカンドボールを拾ったりしながら縦にスピーディーかつパワフルに攻め込むスタイルで相手ゴールに迫る。⑪秋本と⑮平井はポストプレーで攻撃の起点となったり、相手DFラインの背後のスペースを突くランニングでチャンスメイクしたりするなど献身的なプレーで攻撃をけん引した。また前線へのロングボールを多用することで、得意とするセットプレーを獲得する機会を増やすことにつなげていた。今大会で挙げた5得点のうち、OGを除く4得点がセットプレーからのゴールであり、大きな得点源となっていた。左SB⑮鈴木はロングスローやFK・CKのキッカーとして高い能力を発揮し多くの得点に絡む活躍を見せ、セットプレー時の欠かせない重要な選手の1人であった。守備は、前線から圧力をかけて相手の攻撃を制限し、前向きでボールを奪うことがよくできていた。またゴール前まで攻め込まれるピンチの場面では、空中戦や対人の強さのある両CB③増子と⑥新井、守備範囲の広さとシュートストップに優れたGK①木村を中心に粘り強く対応しゴールを死守した。総体県予選に続きあと一步のところまで全国には届かなかったが、選手権大会県予選で初の決勝進出を果たし大舞台でも臆することなく自分たちのサッカーを表現することができていた。今大会での悔しさを糧に、悲願の初優勝に向かって鍛錬を重ねていく成徳深谷の今後の飛躍に期待したい。

3位の埼玉栄は基本システムを1-4-4-2とし、相手の守備の状況に応じて速攻と遅攻を使い分ける攻撃と、前線からの積極的なプレスと出足の鋭い守備が持ち味のチームであった。身体能力の高さを生かしたポストプレーと力強いドリブルが魅力のFW⑩安倍が攻撃の核となり、ゲームキャプテンで左SH⑩樋口が推進力のあるドリブル突破からサイドを崩し、多くの好機を演出する活躍を見せた。3回戦の前回王者の西武台戦、準々決勝の細田学園戦ともに両CB③容貝、⑤目黒を中心に堅実な守備で相手の攻撃をゼロに抑え込み、1-0で勝利し、12年ぶりに4強入りを決めた。準決勝の昌平戦は守備的に戦うのではなく、自チームのスタイルで真っ向勝負を挑んだ。結果は2-4で敗れたが、昌平相手に2点を奪

ったり、互角の戦いができていた時間帯もあったりするなど埼玉らしいプレーを随所に見せてくれた好試合であった。今回の敗戦を機に、さらなる高みを目指していく埼玉の今後の活躍に注目していきたい。

同じく3位の浦和学院は基本システムを1-4-4-2とし、各選手の戦術理解度が高く、攻守にコレクティブなサッカーを展開するチームであった。攻撃は、フィジカルと空中戦の強さのある⑩上田、スピードに乗ったドリブル突破を武器とする⑪石川の強力2トップにボールを集めて起点を作り、中盤の選手が素早くサポートして厚みのある攻撃を仕掛けた。守備は、コンパクトな陣形を保ちながらチャレンジ&カバーを徹底し、相手の攻撃の良さを消してボール奪取を図る。また攻守の切り替えが早く、リスクマネジメントもできているため、相手に決定機を作られる場面は少なかった。準決勝の成徳深谷戦前半は、セットプレーから2失点を喫し、攻めても相手の素早いプレスに攻撃の糸口を見つけることができなかった。後半に入ると相手のプレスを回避するポジションで効果的なパス交換ができるようになり、相手陣地でプレーする時間が増え、試合終了間際にPKから1点を返した。1-2で惜しくも敗れたが、浦和学院のスタイルを貫いたサッカーで見応えのある熱戦を演じてみせた。1回戦から厳しく緊張感のある戦いを経験していくなかで、選手間の関係が深まり、チームとしての完成度や成熟度が高まっていった。その結果が19年ぶりのベスト4進出につながったと言える。今大会での経験を糧に、個とチームのさらなるレベルアップを図っていく浦和学院の今後の成長に期待したい。

今大会を振り返ると、「U18リーグ戦と同様の戦い方をするチーム」や「トーナメント方式の戦い方に変えてきたチーム」、「対戦相手に応じて戦い方を変えるチーム」など様々なチームコンセプトとスタイルが見られた。各チームの指導者と選手が大会形式やレギュレーション、対戦相手とのパワーバランスなどを熟考した上で、勝つためのベストな戦い方を選択して試合に臨んでいたことがうかがえた。そして、上位に勝ち上がったチームの共通点として、「攻守の切り替えの早さ」が挙げられる。特に、「攻撃から守備の切り替えの早さ」の向上が顕著であったと感じた。ボールを失った瞬間に即座に奪い返し攻撃に転じるなど良い場面が多く見られた。「ゲーゲンプレス」、「カウンタープレス」、「即時奪回」といったワードに代表されるように「攻撃から守備の切り替えの早さ」は、現代サッカーにおいてフォーカスされ、試合を優位に進めたり、結果を左右したりする重要な要素として捉えられている。そのため、日常の練習や試合から「攻守の切り替え（特に、攻撃から守備）の早さ」を追求して取り組んでいくことが必要である。そして、攻守の切り替えがさらに向上していくことで拮抗したハイレベルな試合を数多く繰り広げていってほしい。

最後に、昌平には本大会までの限られた時間のなかで最善の準備をし、昭和56年度第60回大会に武南が全国制覇を成し遂げて以来の埼玉県チームが日本一に輝くことを期待し結びとする。